線が踊り、線が奏でる 銅版画の世界

風にゆれる少女の髪のような、鼻歌のやさしい旋律のような、繊細でしなやか、透明感と深みのある線が、なんといっても銅版画の魅力である。他の素材では得られないタッチが、銅によって創られていく。躍動する線が奏でる世界へ、銅という素材がつくりだす芸術の世界へいざないたい。

悪魔に魂を売ったファウストと、その後に報われて昇天するまでの詩劇が、鮮やかな色とともに表現されている。**ファウスト Ⅰ，Ⅱ（集英社）**

不規則に銅板を切り、その銅板の形からイマジネーションを受け、モチーフを描いた作品
本の話（文藝春秋 2001年8月号） ヘンリーミラー 銅版

小中学校時代に、初めて握る彫刻刀にとまどいながら、板を彫った木版画はみなさんご存知であろう。木版画は表面の凸部分にインクをつけて印刷をする方法だが、銅版画はその逆で、銅板の表面に彫られた凹部にインクをつけ、圧力をかけて紙に写しとる版画方法である。

銅版画は凹部分の作り方によって大きく二つの技法に分けられる。一つは刃物で直接板を彫っていく直刻法。もう一つは金属が酸に溶ける性質を利用して溝をつける腐食法で、特にエッチングと呼ばれる技法は、多くの銅版画家が用いている。

エッチングの作り方は、まず銅板表面にグランドというニスを薄く塗り、裏に腐食止めを施す。そして、ニードルでスーッ、スーッと銅板のグランドの膜を剥がすように絵を彫っていく。彫るというより傷をつけていくと言った方がいいだろう。力を入れずに描けるので、エッチングの線は軽やかで繊細に仕上がるのだ。銅板に絵が描けたら、硝酸か塩化第二鉄のどちらかの腐食液に浸けて、腐食する。腐食により銅板に溝がつくため、腐食時間の長短が線の強弱を決定する。そして版ができ上がると、いよいよ印刷に入る。銅版の溝にクリーム状のインクを詰め、表面の余分なインクを拭取りプレス機にかける。圧力をかけて紙に写し取り、銅版画が完成となる。

驚くことにこの技法は、中世からほとんど変わっていないという。そもそも銅版画は十五世紀初め、ヨーロッパで金属の装身具、食器や燭台などに彫りの模様をつける彫金の技術から生まれた。たくさん刷れて、多くの人が手に入れやすい銅版画は、聖書をはじめとして書籍の挿絵に用いられ活躍した。やがて写真が登場すると、画家たちは個性を表現する手段として積極的に銅版画に取り組むようになり、銅版画は芸術表現としての側面が強まるようになった。

特にエッチングは、レンブラント、ゴヤ、ピカソなど錚錚（そうそう）たる画家が作品を残しており、なかでも

山本容子（やまもとようこ）

銅版画家。1952年埼玉県生まれの大阪育ち。京都市立芸術大学西洋画専攻科修了。誰もが身近に楽しめる作品でアートの可能性をひろげようと、書籍の装丁・挿画・エッセイ集・絵本の他、アクセサリーや壁画まで幅広い創作活動を展開している。

作品集『PRINTS』『展覧会の展覧会』、エッセイ集『わたしの美術遊園地』、『プラハ旅日記』、挿絵『赤毛のアン』『ファウスト』、絵本『おこちゃん』『犬のルーカス』『はなうた巡礼』『ファウスト』『絵本 フランスの頑固なレシピ』、BOOK&CD『エンジェルズ・アイ』『エンジェルズ・ティアーズ』など著書多数。

現在、朝日新聞に『静かな大地』（池澤夏樹著）の挿絵を連載中。今秋は、ルイ・ヴィトン・ジャパン本社屋の建設期間中に光による作品展示を試みるなど多彩な活動を行っている。

山本容子オフィシャルサイト
http://y-yamamoto.cplaza.ne.jp

ピカソは数々の傑作を生みだしている。日本では、山本容子さんなどの活躍が注目を集めている。

銅版画家、山本容子の世界

テレビ番組やCMなどで山本容子さんを知ったという人も多いと思うが、一般に知られる前から、版画界ではスターであった。京都芸術大学時代から数々の賞を受賞し、版画家として高い評価を受け続けている。今年は、新しい銅の需要促進に貢献したとして「第二十八回日本銅センター賞」を受賞している。

かぎられた世界で活動することが多い現代美術家にくらべ、山本さんは書籍の装丁や、挿絵、絵本、アクセサリーや壁画まで、どんどん外に飛び出して行っている。彼女の作品が幅広いフィールドで輝きを放っているのは、なによりその親しみやすさであろう。多くの人が手にとって楽しめる気軽さ、一瞬で入りこめる吸引力、明るく軽やかに線は弾み、唄うように遊んでいる。まるで音楽が聞こえてきそうなタッチである。また彼女は、いち早く銅版画に手彩色の色彩を取り入れ、モノクロにない鮮やかな作品を創り出している。

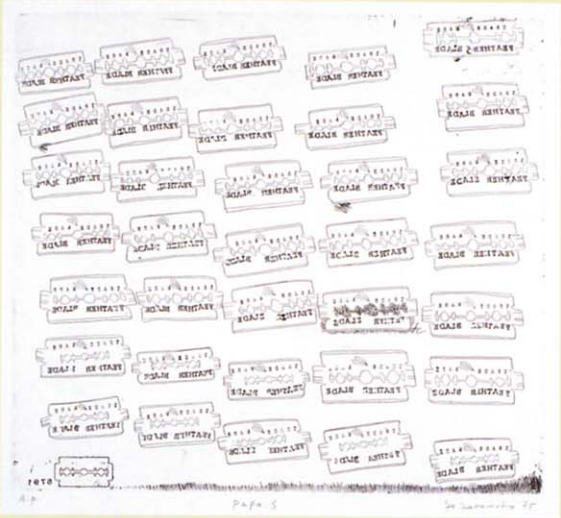
親しみやすい一方で、それだけではないところが山本容子作品の魅力である。ユーモアとウイットにとみ、ドキッとさせる刺激がある。初期の頃のカミソリをモチーフとした作品など、とっかかりやすいと思っているとパンチをくらう、たとえて言うなら〝安全ピン〟のようである。なじみやすく気軽に扱えるが、実際はチクチク尖がっている。だからこそ、面白い、見飽きない、そこが評価の高い点でもある。

はじめて彼女が銅版画に出合ったのは大学二年の時で、「銅板を磨いて彫って、そこにインクが入りすっと紙に写し取られる、そのプロセスが息を飲むように美しかったのです。大きな機械のかたまりから、繊細な線の作品が生まれてくる、それはまるで魔法を見るようでした」と当時を振り返っている。エッチングの美しい線に魅せられて、23才で個展を開く1975年から、制作した作品数は約三千点以上。アーティストの部分と錬金術師のような職人の部分、両方の面白さが銅版画の魅力だと語っている。

彼女は銅版画に取り組む際、いっさい下絵を描かない。版画なので左右が逆になることを頭において、いきなりニードルで銅板に描画していく。絵を描くことを楽しみ、その瞬間に生まれる線の勢いを生かしたいという。記憶や思いがけず生まれたリズムに導かれて瞬時に絵を定着させていく。まるで一瞬を閉じ込める押し花のようだ。

山本さんは日々、銅板に描く行為が、セクシーに感じることがあるという。画家の感性に寄り添い、感応していく銅の性質。きれいに磨かれた銅板は、するどい傷を、豊かな線に変身させる。

魔法の芸術、銅版画である。



大量の男性用カミソリが踊っている。下のほうにチョロチョロ生えているのは男性のヒゲ、その他ヒゲがはさまったカミソリもあってドキッとさせられる
PaPa's 1975 <JUNE BRAND'75>

さまざまな工程を経て製版された銅版（右）この銅版から刷り上げられた作品（左）**大発見（集英社）**